

『語文』が示す勉学の方法と教師像 ——中国人民教育出版社『義務教育課程標準実験 教科書 語文』七年級上冊を中心に

西川真子

はじめに

I 『語文』七年級上冊第二単元の教材と構成

II 『語文』の中の教師像

おわりに

はじめに

中国の義務教育課程における語文科目は日本の国語科目に相当するが、この科目は義務教育課程の学習全般を支えるための土台となっているのと同時に、国民が社会参加のために必要とする言語能力の習得と、国民として共有すべき知識の獲得を学習目標とする。

中国の義務教育課程における語文科目の実施要領として中国教育部が定める「義務教育語文課程標準（2011年版）」（以下、語文課程標準）は、語文科目の教育目標として、「(一) 公民として社会生活を送るのに必要な言語能力を育てるとともに、愛国主義、集団主義、社会主義思想に基づく道徳と健全な審美観を養い、個性を伸ばし、創造と協力の精神を培い、人生に対する積極的な態度と正しい世界観及び価値観を形成する。(二) 中華文化の豊かさと広がりを知り、民族文化の知恵を汲み取るとともに、現代の文化生活に関心を持ち、多様な文化を尊重し、人類の優秀な文化の真髄を吸収し、文化の品位を高めることに重点を置く。」とする。¹この目標を達成

するために、語文課程の教科書は多様な教材を選び、教材間の関係を考慮して構成されている。

筆者はこれまで、中国の義務教育課程の中で小学一年～六年対象の語文科目の教科書の構成と内容を分析してきた。本稿では小学課程を修了後、義務教育課程第七年級（日本の中学一年に相当）の授業で現在使用されている語文科目の教科書『義務教育課程標準実験教科書 語文』（人民教育出版社）² 七年級上冊第二单元について考察する。

中国の義務教育課程の中で第七～九年級は日本と同じく中学生に当たり、今後さらに高度な教育を受けるための準備時期であるとともに、社会参加に必要な基礎知識と思考力を養う期間ともなる。そのため『語文』七年級上冊第二单元は、学習者に勉学の意義を説くために、「青少年の学習生活」を主題とし青少年の勉学に関わる教材を集めている。本稿では、同单元に如何なる教材が載録されているのか、学習者に対して勉学の在り方を如何に説明しようとしているのかを考え、教材の中に描かれる児童生徒と教師の関係、並びに勉学の達成に対して教師が果たす役割について明らかにしたい。

I 『語文』七年級上冊第二单元の教材と構成

『語文』七年級上冊第二单元の学習目標について、同单元の前文は次のように説明する。

初めて言葉を覚え、学校に入学し、さらには社会へと羽ばたいた後も、人間は生涯を通じて勉学を続けていく。特に青少年は、大部分の時間を勉学に費やし、学校の内外を問わず、大きな成果を獲得する。この单元では、青少年の学習生活を反映した文章を選んだ。これらの教材を閲読することにより、我々は時代と制度の違いを越えて、生徒児童の学習生活を理解し、我々の勉学と生活への啓発を与えられる。³

同じく『語文』七年級上冊のための『教師教学用書』は、この単元の学習目標について、以下のように記す。

1. 異なる学習環境を理解し、作品中の人物の性格、思想、心情を理解し、先生や同級生への理解と愛情を育む。
2. 自分の学習状況と比較し、テキストの中から有意義な教えを汲み取る。

(以下省略)⁴

上記2つの資料が示すように、『語文』七年級上冊第二単元の日標は、青少年の勉学を主題とする作品を閲読し、作品に登場する人物の個性と思想、並びにその学習環境と師弟関係を理解し、自分自身の状況と比較して教訓を得ることとされている。そこで本章では以下に、『語文』七年級上冊第二単元に収められた五つの教材について分析を試みる。

(1) 第6課「わたしの先生」(我的老师)⁵

第6課「わたしの先生」は、現代中国の作家魏巍（一九二〇～二〇〇八）の同名作品を原作とする。魏巍は河南省出身、小学校卒業後、簡易師範学校に進んだが、一九三七年に日中戦争が始まると、山西省の前線で八路軍に参加した。一九三八年には延安軍政大学に学びつつ同年四月中国共産党に入党し、解放戦争中は兵士として従軍中も文学作品を書きつづけた。建国後も一九五〇年に朝鮮戦争がはじまると志願して前線で戦闘に加わりながら、代表作となる『谁是最可爱的人』（最も愛すべき人は誰か）等を執筆し、中国社会主义革命の時代を代表する作家として評価されるに至った。

「わたしの先生」は一九五六年十月に『教師報』に掲載された後、一九五九年に『春天漫筆』に収められ、さらに『建国十年文学創作選〈散文特写〉』の中の一作に選ばれた。この作品の中で作者は、小学校時代の恩師蔡芸芝先生を最も忘れ難い教師だと言う。本文によれば、蔡先生は当時十八歳か十九歳の女性教員で、当時の中国の小学校で頻繁に行われていた体罰

を用いることはせず、児童を慈しんだ。蔡先生は授業以外の時間にも児童に遊戯を教え、さらに休日に児童を自宅等に呼び寄せるなど学外でも児童と密接に関わる姿が本文に記されている。授業方法に関しては、蔡先生は詩を愛し、中国の科学者で詩人としても活躍した周太玄の詩「印度洋をわたる」にメロディをつけて朗読し児童に聞かせたことが、後に作者が文学の道を進んだことと無関係ではないと記されている。

本文では、作者にとって蔡先生が生涯で最も忘れ難い存在となったのは、蔡先生が作者の家庭の事情を知って精神的な支援を惜しまなかったからだとされる。当時、作者の家庭では父親が軍閥部隊に関わって何年も家を空け音信不通となっていた。作者は母と二人で家を守っていたが、同級生たちは父親の不在をからかいの種にした。これに対して蔡先生は同級生を諫め作者を励ましたとある。

『教師教学用書』には、この教材の教学目標を「文章の筋道を理解し、師弟関係のありさまを知ること」⁶と記されているが、同課が描く児童と教師の関係は一つの理想像として掲げられている。

(2) 第7課「生命を蘇らせた人」(再塑生命的人)⁷

第7課「生命を蘇らせた人」には、盲聾啞の障害を抱えた米国の著述家ヘレン・ケラー（一八八〇～一九六八）が恩師アン・マンズフィールド・サリバン先生に導かれ、障害を乗り越えて言葉を獲得する姿が描かれる。この教材の原作は、一九〇三年に出版されたヘレン・ケラーの著書“The Story of My Life”⁸として広く世界中で愛読されている。同書の中国語訳は、一九七〇年翻訳者李漢昭によって『假如给我三天光明』⁹という表題で発表された後、今日まで複数の翻訳者による中国語版が出版されている。翻訳書以外にも、ヘレン・ケラーの生涯を紹介する絵本など関連書籍も多数出版されており、ヘレン・ケラーの名は中国においても、障害に屈せず勉学を志した人物として象徴的な存在と位置付けられている。

ヘレン・ケラーが熱病の後遺症で盲聾啞の障害を背負ったのは二歳の時

だった。他者との意思疎通の手段を失った彼女は、一八八七年は七歳の誕生日を前に家庭教師としてやって来たサリバン先生に出会った。サリバン先生は当時まだ二十歳前後の年齢で盲聾啞者の教育について経験も浅かったが、ヘレンの教育に全てを注いだ。「生命を蘇らせた人」は、二人の出会いから、サリバン先生の導きによりヘレンが言葉を理解する場面が描かれている。これは、ヘレン・ケラーの類稀な経験談というだけでなく、人間にとって言葉が如何に重要な存在であるのかを理解する上でも、他に類の無い教材となっている。

第7課「生命を蘇らせた人」は、ヘレンの感動を率直に表わす次の言葉から始まる。

アニー・サリバン先生が我が家にやって来た日、それはわたしの生涯において、最も重要な一日となった。それは一八八七年三月三日のことで、当時わたしは満六歳と九ヶ月を迎えたばかりだった。この日を境に以前とは全く異なるものになった、その後の日々のことを思う度に、わたしはその不思議な運命に言葉を失ってしまう。¹⁰

次いでヘレンとサリバン先生の出会いの場面は以下のように記される。

誰か知らない人がわたしの手を握り、わたしを強く抱きしめた。わたしは、その人がわたしに対しこの世の真理を教えるためにやって来たこと、わたしに愛を降り注ぐためにやって来た人なのだと分かった。この人こそ、アニー・サリバン先生であった。¹¹

サリバン先生の授業は二人が出会った翌日から始まった。サリバン先生は、ヘレンに人形を与えると同時に、ヘレンの掌に指で「doll」と綴った。ヘレンはこの方法で、pin、cup等の単語の綴り、更にはsit、stand、walkなどの動詞の綴りも覚えたが、この時のヘレンにはこれはまだ新しい遊びで

しかなかった。サリバン先生とヘレンには、「水」と「杯」の意味を理解するための格闘が待っていた。サリバン先生はヘレンにコップに入った水を渡し「水」という言葉を教えようとしたが、ヘレンには「水」と「杯」を区別することが出来なかった。サリバン先生は、苦心して「water」という綴りは水という物質を表わすことを理解させようとしたのだが、ヘレンは苛立って癩癩を起こしてしまった。行き詰ったサリバン先生は気分転換を図り、ヘレンを散歩に誘い出した。その道すがら、通りがかった井戸の前で、サリバン先生はヘレンにほとぼしる井戸水をその手に受けさせながら、もう片方の手にwaterと綴った。この瞬間に、ヘレンはwaterという綴りは水を意味すること、水と杯はそれぞれ個別の物であること、そして全てのものには名前があることを知った。この一件は、ヘレンの知識欲に火をつけた。ヘレンは学ぶ喜びを知り、満たされた思いで一日を終えた。本文の最後は次の言葉で締めくくられている。

その日一日だけで、わたしはたくさんの字を覚えた。お父さん (father)、お母さん (mother)、妹 (sister)、先生 (teacher) など。これらの字は、わたしの世界を薔薇色に変えた。

そのすばらしい日の夜、わたしは独りベッドに横になり、喜びに満たされ、明日また新しい日がやってくるのが待ち遠しくてならなかった。世の中に、わたしより幸せな子どもなんて、いるんだろうか。¹²

サリバン先生は試行錯誤の中でヘレンに言葉と文字を教え、ヘレンはこれに応じて言葉の概念を理解するに至った。同課では本文につづく「討論と練習」に四つの設問が掲げられているが、その第一項「全文を通読し、原作者の心情を感じ取り、ヘレン・ケラーの生涯と経歴のあらましを知り、ヘレンは何故サリバン先生を『生命を蘇らせた人』と称したのか話し合うこと」¹³は、最も重要な課題となっている。さらに『教師教学用書』には「学生に課外活動として、ヘレン・ケラーに関する作品を読ませ、盲聾啞者

の生活に対して理解を促す。すなわち本文を学習する過程で、盲聾啞者の立場から彼らの生活空間を学生に理解させる。これによって同課の教材に対する深い理解を促すこと可能となる」¹⁴とあり、同課の学習に留まらず、学習者がヘレン・ケラーの著作を鑑賞することを期待している。

(3) 第8課「若き日のわたし」（我的早年生活）

第8課「若き日のわたし」は、一九三〇年に発表された英国の政治家ウィンストン・チャーチル（一八七四～一九六五）の自伝の“My Early Life”¹⁵を原作とする。チャーチルもまた、ヘレン・ケラーと同様に子供時代から強い個性を発揮し、後年世界に名を馳せた人物である。チャーチルは政治家として英国首相を二度にわたって務めただけでなく、一九五三年にはノーベル文学賞を受賞し文学者として多くの作品を残している。“My Early Life”には、チャーチルの生い立ちから二十六歳で下院議員となるまでが描かれているが、原作が発表された後、各国で多くの言語に翻訳され、世界中で親しまれる作品となっている。その中から、第8課「若き日のわたし」には、チャーチルが英国を代表するパブリック・スクールの一つ、ハロウ校の入学試験に臨む場面から同校入学後の状況を記す部分を取り上げられている。本文に先立ち同課の冒頭には、この教材の学習課題が以下のように表示されている。

ウィンストン・チャーチルは二度にわたり英国首相を務めるとともに、ノーベル文学賞をも受賞した。このような偉大な人物の幼年時代の学習生活はどのようなものだったのだから。彼は「後ろから数えて三番目」の成績でハロウ校に入学し、「運よく」将兵学校の試験に合格したという。しかし、彼は本当に運に頼っただけなのだろうか？彼が偉業を達成した礎には何が有ったのか？本文を黙読すれば、ユーモア溢れる行間から、有益な啓示を得るはずだ。¹⁶

上記のように同課の学習目標は、学校教育の場において落第生だったチャーチルが如何に子供時代を過ごしたか、彼の自伝から教訓を得ることにある。本文の中でチャーチルは学校の成績が全く不振だったことを、以下のように書いている。

わたしは十二歳になると「試験」という冷酷な世界に足を踏み入れた。試験官たちが最も好きな科目は、どれもこれもわたしが最も嫌いな科目だった。わたしは歴史、詩歌、作文が好きだったが、試験官たちはラテン語と数学に肩入れし、常に彼らの意向が優先された。しかも、わたしは彼らにはわたしが知っていることを尋ねてほしかったのに、彼らはわたしが知らない事しか質問しなかった。わたしは自分の学識を披露しようと思っていたのに、彼らはあの手この手を使ってわたしが如何に無知であるかを暴き立てた。その結果、わたしは試験の度に連戦連敗を重ねる羽目になったのだ。¹⁷

チャーチルはハロウ校の入学試験でも苦戦した。特にラテン語と数学の試験はほとんど白紙に等しかったが、同校ウェルドン校長に入学を許され、最下位のクラスに滑り込んだ。だが、彼はここで冷静に現実を見つめ自分の長所を磨いた。すなわち、成績最下位者が集まるチャーチルのクラスではラテン語、ギリシャ語の授業は実施されず、代わりに英語を根本から教え込むカリキュラムになっていた。ここでチャーチルは徹底的に英語の文章構造を学び、後に文学者として作品を世に問う基礎を作った。この時期の事情をチャーチルは次のように記している。

ずっと成績下位のクラスにいたので、わたしは優秀な生徒よりもうんと得をした。彼らはラテン語、ギリシャ語など輝かしく名誉溢れる授業を受けなければならなかったが、わたしは英語しか出来ない劣等生とみなされたのだ。そのお蔭で、わたしは英語の文章の基本構造を徹

底して覚えこむことが出来た。数年後、わたしは美しいラテン語の詩やギリシャ語で風刺の効いた詩を書く優秀な同級生たちが、生活に迫られて、或いは事業を開拓するために普通の英語を書かざるを得なくなった時に、わたしは彼らと比べて何ら引けを取らなかったのだ。¹⁸

チャーチルは劣勢にある時も自分の置かれた状況を判断し活路を見出した。彼は苦手なラテン語や数学は克服できなかったが、自分の長所を伸ばすべく努力した。その結果、彼は英語の文章力を十分に磨いたのに加え、マコーレーの詩『古代ローマの歌』を全文暗唱し全校生徒の中で優等賞を獲得した。自分の道は自力で切り開くことを知った後、チャーチルは王立陸軍士官学校への選抜試験に挑んだ。試験に当たっては、ハロウ校でチャーチルより成績が上位にあった者の中から落第者が出たが、チャーチルは彼らを抑えて合格を果たした。これらの経験を語るチャーチルの文章は、自力で窮地を切り抜けて自分の生きる道を見つけた者の自信と余裕が漲っている。

この教材に対し本文に付された「討論と練習」(三)は、「本文を読むと、諸君はチャーチルを幸運に恵まれた人物だと思ふかもしれない。ラテン語が零点であったにもかかわらずハロウ校の校長から入学を許可されたこと、陸軍士官学校の選抜試験でヤマを張って準備したところ、翌日の試験でその問題が出題されて合格できたこと等、彼の成功は幸運によるものなのか？本文の内容に則して自分の考えを述べよ」¹⁹という問いが設けられている。また『教師教学用書』では「教学目標」にも「文章に表現されている諧謔幽默に満ちた言語の特色を味わい、作者の思想感情を読み取る」「チャーチルがハロウ校在学中に受けた教育とその後の人生経験から、学校生活が人生に与える影響について考えること」²⁰を挙げている。このように「若き日のわたし」は、諧謔と幽默に溢れる文章を鑑賞し作者の真意を読み取ること、また逆に自分の体験を幽默溢れる文章で表現する手法を学ぶための教材だと位置づけられている。

(4) 第9課「王幾何」(王几何)

第9課「王幾何」は、二〇一三年以来『語文』七年級上冊に載録されているが、原作は『童年旧事』(四川少年兒童出版社 二〇〇八年版)の中に収められている。原作者馬及時(一九四六年～)は四川省都江堰市の出身で、中学卒業後は建築関係の仕事をしてしながら雑誌や新聞の編集に携わり、一九八一年以降は児童詩、散文を中心に作品を発表してきた。一九九七年には中国作家協会に加入しており、著書には散文集《最后一片的树叶》、詩集《泥土与爱情》等が挙げられる。

「王幾何」は現代中国の中学を舞台に一人の幾何教師とその授業風景を描く作品である。本文に先立って同課の冒頭には「この作品が描く先生は、魏巍の作品中の先生とは異なる。本文を読む前に表題について想像しよう」²¹と説明されている。前述したように第6課「わたしの先生」には、二十歳に満たない小学校の女性教師が、肉親さながらに児童を慈しむ人物として描かれている。これに対し「王幾何」には、生徒たちを笑いで包みながら、長年の経験に裏打ちされた独自の方法で幾何を教える中学の男性教師の姿が描かれる。表題の「王幾何」とは、生徒たちがこの教師につけた渾名である。

第9課「王幾何」は現代中国の教師像を描く点で第6課「わたしの先生」の延長上に設定されているが、第8課「若き日のわたし」の流れを継いで「幽默」に力点を置く教材でもある。チャーチルの自伝を原作とする第8課「若き日のわたし」には軽妙洒脱な文体で、現実を冷静に判断し過酷な情況に直面しても幽默を失わない原作者の体験が描かれている。この後につづく第9課「王幾何」は中国の中学生にとってより身近な現代中国の中学校に舞台を移し、意表を突く行動で生徒を笑いに包み込む教師の姿を描いている。

語文課程の学習計画全体から見ると、「王幾何」は文章表現を学ぶ為の教材とも位置づけられる。本文に付された「討論と練習」には、「この作品は、典型的な『人物を描く文章』である。作者は登場人物の外見、雰囲気

気、言葉、動作など多様な角度から、一人の教師の姿を描写している。文中から該当する部分を選び出し、その特色についてクラスで意見交換をすること」²²とある。同じく『教師教学用書』にも、「この教材は人物を叙述する文章の典型である。作者は自分が中学一年生で初めて受けた幾何の授業について書き、類まれな幾何の先生の姿を浮き彫りにする」²³と説明する。また同じく教学目標には「文章の内容を把握し、人物の描写方法を鑑賞する」、「様々な角度から人物描写の方法を学ぶこと」²⁴とあり、本文から王先生の容貌と幾何教師としての姿勢を読み取るよう導かれる。

『教師教学用書』が説明する通り、「王幾何」の本文は主人公の容貌を記すところから始まる。作者は主人公の身体的特徴を的確にとらえ、四角い頭、大きな耳、背が低く太った体軀にも関わらず素早く動く身体、満面に笑みをたたえて教壇に立つ姿等を明快に描いた後、本文の後半では、王先生が常ならざる個性と確固たる教育方針の持ち主であることを明らかにする。すなわち王先生は後ろ手で黒板に完全に正確な円と正三角形を描くという技を披露し、さらには数年前に生徒たちが彼に付けた渾名「王幾何」を黒板に大書し、生徒たちに「自分をあだ名で呼んでくれると嬉しい」と告げる。王先生は思いもかけない言動で生徒たちの心を掴むと、生徒たちに黒板に白墨で完全な円形と正三角形を描くように求めた。生徒たちはチョークを手で黒板に挑んだが、正確な円と正三角形を描ける者などいなかった。王先生は生徒たちの書いた図形を見ながら次のように述べた。

わたしは漫然と円や三角形を描いてきたものではありません。わたしは教師として二十年以上も中学で幾何を教え、幾何教育に生涯を捧げてきました。わたしが後ろ手に円を描いて見せたのは、努力しさえすれば物事は達成できるということを説きたかったからです。知識を熱愛する気持ちとたゆまぬ努力を忘れないでほしい。²⁵

この一言によって王先生は風変わりな教師から、理想を追い求める教育

者へと変貌し、本文は勉学への方法を説く教材として「四十二名の生徒たちにとって彼らの中学時代は生涯忘れ難く記憶されるものとなった」²⁶という言葉で締めくくられる。

(5) 第10課『論語』十二章』（《论语》十二章）

七年級上冊第二単元の最後の教材第10課『論語』十二章は表題の如く、中国春秋時代の思想家で儒教の創始者孔子とその弟子達の言行を記録した、儒教の経典『論語』から勉学に関する章を抄録した教材である。

現代中国において孔子は、第一に教育者としての側面に光をあてられる。『論語』十二章には孔子について説明はないが、『語文』と並んで中国の義務教育課程で使用されている歴史科目の教科書『中国歴史』七年級上冊第9課は儒教を中心とする中国古代思想を主題とし、その中で孔子は第一に「偉大な教育者」と称されている。²⁷

『論語』は庶民にも親しみ易い内容を多く含むことから、儒教経典の中で最も広く読み継がれてきた。その結果、『論語』の中の多くの章句が今も日常生活の中で引用され、現代中国語の中で重要な語彙の一部となっている。そのため『論語』は、現代中国語の語彙習得という点からみても、義務教育語文課程の中で重要な教材と考えられている。こうした事情を背景に『論語』十二章はどのように構成されているのだろうか。

『論語』は全二十篇約五百章から成り立ち、取り上げられる主題は多岐に渡る。その中で孔子とその弟子の対話は大きな比率を占めており、学問や勉学に関わる問答が随所に現れる。それらの中から、第10課『論語』十二章には以下の章が収められている。

一：子曰：“学而时习之，不亦说乎？有朋自远方来，不亦乐乎？人不知而不愠，不亦君子乎？”（《学而》）

二：曾子曰：“吾日三省吾身：为人谋而不忠乎？与朋友交而不信乎？传不习乎？”（《学而》）

- 三：子曰：“吾十有五而志于学，三十而立，四十而不惑，五十而知天命，六十而耳顺，七十而从心所欲，不逾矩。”（《为政》）
- 四：子曰：“温故而知新，可以为师矣。”（《为政》）
- 五：子曰：“学而不思则罔。思而不学则殆。”（《为政》）
- 六：子曰：“贤哉，回也！一簞食，一瓢饮，在陋巷，人不堪其忧，回也不改其乐。贤哉，回也！”（《雍也》）
- 七：子曰：“知之者不如好之者，好之者不如乐之者。”（《雍也》）
- 八：子曰：“饭疏食饮水，曲肱而枕之，乐亦在其中矣。不义而富贵，于我如浮云。”（《述而》）
- 九：子曰：“三人行，必有我师焉。择其善者而从之，其不善者而改之。”（《述而》）
- 十：子在川上曰：“逝者如斯夫，不舍昼夜。”（《子罕》）
- 十一：子曰：“三军可夺帅也，匹夫不可夺志也。”（《子罕》）
- 十二：子夏曰：“博学而笃志，切问而近思，仁在其中矣。”（《子张》）

以上十二章はいずれも勉学の目的や方法など何らかの点で勉学と関わりを持つが、第二単元の主題である「青少年の学習生活」に直結するのは、第一章、第三章、第五章、第九章、第十二章である。

第一章は『論語』の巻頭にあり、『論語』全篇の精神を集約するとされている。すなわち、「学んだことを繰り返し復習するのは楽しいことではないか。友人が訪ねて来て語り合うことができることは幸せなことではないか。世間が認めてくれなくても不満に思わない。それでこそ君子ではないか」という主張は、『論語』の中で繰り返し論じられる。第三章は学問に一生を捧げた孔子の生き様を述べる。特に「十五歳で学問の道を進もうと決意した」の部分は、中学一年の学習者に対して勉学への心構えを論じるのに、この言をおいて他はない。第五章は学問を進める上で、手本に倣った学習と、得た知識を熟考することと、どちらにも偏らず並行して進める必要を説く。孔子がここに言う「学」とは、単に特定の学問分野における知

識習得を指すものではない。孔子にとって「学」とは人格の陶冶と道徳的修養を達成するために学ぶ行為を意味する。孔子はこの境地を「仁」という語で表現した。よって、『論語』について語るならば、孔子が最も重視した「仁」について言及しないわけにはいかない。第十二章は、この単元の主題である「勉学」から「仁」に言及し、正しい方法で勉学に専念すれば自ずと仁徳が生まれることを説き、勉学と仁の思想をつなぐ役目を担っている。

上記四章が勉学の方法を説くのに対し、第六章、第七章、第八章は、いずれも過酷な環境の中で学問に没頭し楽しむ者を讃える。孔子は、如何に過酷な環境にあらうと、これに左右されず学問を楽しむ者を称賛する。しかし勉学に専念し尚且つこれを楽しむ境地に達する者は稀である。第十章、第十一章は、無常に過行く日常を静観しながらも現実には屈することなく志を貫く者を鼓舞する意味を持つ。まず第十章は、人間に時間の価値を再認識させる言葉として取り上げられている。限りある人生の中で自分の目標の為に費やせる時間は僅かしかない。同章は昼夜を分かつたず流れ去る時間の重みを読み手に再認識させる。これを受けて第十一章は自らの決意は何者も翻すことはできないことを言う。

以上十章を集約すると、自分の意志によって勉学に没頭すれば自ずと仁の境地に到達するという孔子の思想が浮かび上がってくる。後に残った第二章と第四章は、勉学を主題としながら他者を導く教師としての資質を説く。まず第二章は孔子の孫である子思を教えた曾子の言葉を借りて「わたしは日に三度吾が身を反省する。他人の為に思案する際、真心が足りないということは無かったか。友人との交際に不誠実ではなかったか。自分の身につけていないことを教えはしなかったか」と教師たる者に反省を促す問いが示される。同じく第四章においても、「学んだ内容を熟考して自分の血肉とした者だけが他者を導く教師になれる」という孔子の考え方が繰り返されている。

このように「『論語』第十二章」は勉学の意義と方法について孔子の思想

を示した後、本文に付された「討論と練習」には、同課の学習目標として「『論語』十二章」全文の暗誦を指示されている。²⁸これによって「『論語』十二章」は他の四つの教材と異なり、本文の内容を記憶し中国語の語彙として獲得するとともに、履修者に対しより具体的に勉学の方法を提示する教材となる。

以上のように、『語文』七年級上冊第二単元「青少年の学習生活」に含まれる五つの教材を分析し、単元の構成と教材間の関係性が理解できた。これと同時に各教材には、勉学の達成に関わる要素として「教師」に対する考え方が示されていることが明らかになった。各教材の中で示される教師像は何を示すのか、次章で考えたい。

Ⅱ 『語文』の中の教師像

前章で述べたように、『語文』七年級上冊第二単元所収の各課には、それぞれ異なる環境で勉学に取り組む者と、これに関わる教師が描かれている。本章では同単元に登場する教師について考えたい。

現在中国の義務教育課程において教師には何が期待されているのか。一九八六年に制定された「中華人民共和國義務教育法」は、教育活動における教師の権利を保障すると同時に、同法第二十九条に「教師は教育活動の中で学生に対して平等に接し、学生各人の差異に配慮し、個性に応じた教育を施し、学生の成長を促さなければならない。教師は学生の人格を尊重し、学生を差別せず、学生に体罰の行使、並びに体罰に相当する行為や人格の尊厳を侮辱する行為を用いてはならず、学生の合法的權益を侵してはならない」と定める。²⁹この規定には教師に求められる様々な要素が列挙されているが、同法が求める教師の姿は『語文』の中にどのように反映されているのか。

まず第6課「わたしの先生」の中の蔡芸芝先生は一九三〇年代中国農村の小学校で教える二十歳に満たない女性教師である。彼女は児童の学業の

みならず私生活にも関心を注ぎ、教え子の成長を助ける人物として描かれている。建国以前、中国の小学校では教師が児童に体罰を科すのは珍しいことではなかったが、蔡先生は教師の権力を行使することなく児童に接し、家庭生活に困難を抱える児童に支援の手を差し伸べた。その中で主人公の「わたし」は、長年にわたり父親の不在がつづき、その生死を知る術さえ無い中で母親と二人で不安な日々を送っていた。同級生の中には公然と「わたし」の父が生死不明であることを取り沙汰する者もいたが、蔡先生は「わたし」を励まし精神的な支えとなった。

第7課「生命を蘇らせた人」の中のサリバン先生は、教師になったばかりの若い女性という点では第6課の蔡芸芝先生と一致する。だが蔡先生が公的教育機関である小学校の教員であるのに対し、サリバン先生は障害児の家庭教師という立場にあった。「生命を蘇らせた人」には、サリバン先生がヘレンに言葉と文字を教えるために格闘する姿が記されている。多数の児童生徒を公平に指導する学校教師と異なり、家庭教師は特定の対象を個人指導し深く相手に関わることになる。この教材には、教師と児童が一心同体となって困難を克服する、類稀な事例が示されている。

第8課「若き日のわたし」はウィストン・チャーチルの自伝に基づく教材で、第7課「生命を蘇らせた人」がヘレン・ケラーの自伝を原作とするのに続いて、世界的に著名な人物の児童期の学習体験が主題となっている。「若き日のわたし」には劣等生だったチャーチルの学校生活と教育に対する見解が記されているが、前章で述べたように本文の中で作者は二つの点で教師について触れている。すなわち試験の際にチャーチルが答えられない内容を出題しチャーチルの無知を明らかにした試験官と、チャーチルがハロウ校の入学試験に臨み、ラテン語の答えを白紙で提出したにもかかわらず彼の入学を許可したウェルドン校長である。チャーチルは諧謔と敬愛に満ちた筆致で教師たちを回想しているが、ハロウ校入学後、チャーチルにとって教師は決定的な存在とはならなかった。ヘレン・ケラーがサリバン先生の指導によって言葉をつかみ取ったのとは対照的に、チャーチルがラ

テン語と数学を克服するのを手助けする教師は現れず、逆に英語や歴史の授業ではチャーチルは自力で学習方法を見出して成果を上げた。チャーチルにとって学校は、不本意な立場におかれた場合も教師を頼ることなく、自力で目標を達成することを学ぶ場所となった。ハロウ校在学中にチャーチルは軍人への道を志しサンドハースト王立陸軍士官学校を受験して合格したが、これに関して同課本文には「軍事の専門技能以外、その他のことは全て何もかも、誰にも頼らず自力で方法を探し、実践の中で学んだ」³⁰と記されている。このように第7課「生命を蘇らせた人」と第8課「若き日のわたし」は、いずれも世界中で読まれている自伝を抄録した教材であるが、第8課「若き日のわたし」は教師を頼らず独力で学ぶ姿勢を説く点で、第7課「生命を蘇らせた人」とは対照的な教材だと言える。

ヘレン・ケラーとチャーチルという著名な人物に関わる教材を学んだ後、第9課「王幾何」に登場するのは『語文』の履修者にとってより身近な自国の中学教師である。ただし「王幾何」は、第8課でチャーチルの幽默に満ちた考え方や文章表現を学んだ後、再び幽默に富む人物を中心に据えた教材として、第8課の流れを組む教材でもある。他方、第9課「王幾何」は、第6課「わたしの先生」で提示された中国社会において期待される教師像を展開する役目も果たしている。すなわち第6課「わたしの先生」は建国前の小学校を舞台に児童たちにとっては姉とも言える年齢の女性教師を描く作品だったのに対し、第9課「王幾何」は建国後の中学で幾何を担当する経験豊富な男性教師を主人公に据えている。新学期を迎えたばかりの中学の教室に現れた王先生は意表をつく方法で生徒に接しつつ、最後には自分が教師として長年努力を続け、独自の教育方法を培ってきたことを示す。この教材の趣旨は、生徒たちに勉学において弛まぬ努力と忍耐の必要を認識させる点に有るが、それと同時に職業人として絶えず自己研鑽を積む教師の姿が表されている。

第10課「『論語』十二章」の中で教師に対し焦点が当てられている章は四つある。まず第二章と第四章はいずれも教師としての資質を説き、「教師

は学生に対し、過去の歴史や先人の学説を学んで得た知識が腑に落ちるまで熟考した内容しか教えてはならない」と言い、自ら学び続ける者だけが他者の師となるのに値するという孔子の考えを示す。その一方で孔子は、志を以って勉学に専念する者には身分立場の区別なく称賛を惜しまなかった。第六章で師たる孔子が最愛の弟子顔回を最大級の言葉で褒め讃えているのはその典型であり、孔子にとって仁の達成を目標に研鑽する者は、師と弟子の立場を超える存在だったと言える。第九章はこの考え方を逆から論じ、人の師となる者はあらゆる機会をとらえて学ぶ者でなければならず、他者を師として学び自分の糧とする意義を説いている。つまり「『論語』十二章」の中で、教師は自分の立場を自覚して自己研鑽に努め、教師と学生の立場を問わず真摯に学ぶ者を称え、どのような状況に在ろうとも常に他者から学ぶ姿勢を忘れない者として描かれている。

以上のように考察を試みた結果、『語文』七年級上冊第二単元所収の教材は、青少年の教育に対して教師の役割と師弟関係について異なる時代と地域の事例を相互に関連させながら、「『論語』十二章」の中に集約するべく構成されていることが理解できた。すなわち同単元には、教育の場で試行錯誤する教師とこれに触発される児童生徒、教師を頼らず自力で学ぶ必要性を説く教材が互いに接点を保ちつつ示された後、中国の教育史上に多大な影響力を及ぼしてきた『論語』を暗唱教材として提示し、その中で師弟の立場を超えて人格陶冶のために学ぶ者への称賛を示すという複層的な流れが作られていると言ってよい。

おわりに

本稿では、「青少年の学習生活」を主題とする『語文』七年級上冊第二単元所収の教材を分析し、その中で推奨される勉学への姿勢、教師の人物像、並びに児童生徒と教師の関係について考えてきた。その結果、同単元に集められた五つの教材は個々に主題を提示しながら相互に関係し、最後

に第10課「『論語』十二章」の中に収斂されていくことが理解できた。

まず冒頭の社会主義革命の時代を象徴する作家魏巍の原作による第6課「わたしの先生」には建国前の中国で児童のために献身する女性教員が登場し、つづく第7課「生命を蘇らせた人」にはヘレン・ケラーと家庭教師サリバン先生の関係が語られる。この二つの教材は民国時期の中国の小学校教員と一八九〇年代後半に米国で盲聾啞者の教育に当たった家庭教師という相違を有しながらも、両者ともほぼ同年齢で教え子の為に献身した女性教師の姿を、教わる側の児童の視点から表現している。次いで第8課「若き日のわたし」はチャーチルの自伝を原作とする点で、第7課「生命を蘇らせた人」と共通点を持つ。だが、ヘレン・ケラーとは対照的にチャーチルは学校では劣等生と見なされ、独力で自分の長所を伸ばす道を探り当てた。これに加えて「若き日のわたし」は、楽観的で幽默に満ちた言葉で人生観を表現する文章表現の模範例ともなっている。「若き日のわたし」に漂う幽默の精神は第9課「王幾何」に受け継がれ、現代中国の中学生により接近する形で独創性豊かな教師像が示されている。

『語文』七年級上冊第二単元の学習は、最後に第10課「『論語』十二章」を全文暗誦することにより完結する。すなわち「『論語』十二章」は、同単元内の他の教材とそれぞれに接点を保ちながら「勉学の方法」並びに「教師の在り方と師弟関係」という課題に対し孔子の主張を明らかにする。そこで同課は、学んだことを復習熟考すること、如何なる環境に在ろうと勉学に没頭すること、これを指導する教師像を示す一方で、教師を頼らず独力で勉学の方法を確立すべきことを説くと同時に、教師と学生の立場を越えて真摯に学ぶ者への称賛を惜しまない。

このように、『語文』七年級上冊第二単元所収の五つの教材は、勉学の方法と師弟関係の多様性について、類似点と相違点を組み合わせ、いずれにも偏らず相対化して提示されていることが理解できた。中国で使用されている語文科目の教科書『語文』には、単元ごとに設けられた主題に沿って教材が集められている。今回の分析を踏まえ、『語文』課程全体の構想につ

いて、さらに研究を進めたい。

-
- 1 中華人民共和国教育部「义务教育语文课程标准」（2011年版）。

一、总体目标与内容：

课程目标从知识与能力、过程与方法、情感态度与价值观三个方面设计。三者相互渗透，融为一体。目标的设计着眼于语文素养的整体提高。

（一）在语文学习过程中，培养爱国主义、集体主义、社会主义思想道德和健康的审美情趣，发展个性，培养创新精神和合作精神，逐步形成积极的人生态度和正确的世界观、价值观。

（二）认识中华文化的丰厚博大，汲取民族文化智慧。关心当代文化生活，尊重多样文化，吸收人类优秀文化的营养，提高文化品位。

- 2 課程教材研究所・中学語文課程教材研究開発中心編著『義務教育課程標準実験教科書 語文』（以下、『語文』）七年級上冊 人民教育出版社2013年第3版。
- 3 前掲『語文』七年級上冊「第二单元」前文28頁。
- 4 課程教材研究所・中学語文課程教材研究開発中心編著『義務教育課程標準実験教科書『語文』七年級上冊『教師教学用書』（人民教育出版社2013年第3版）第二单元「单元説明」45頁。
- 5 『語文』七年級上冊第二单元第6課「我的老师」。
- 6 『教師教学用書』6「我的老师」（教学建议）二「教学设计」（1）49頁。
- 7 『語文』七年級上冊第二单元第7課「再塑生命的人」。
- 8 HELEN KELLER “The Story of My Life” 1903（New York: Doubleday, Page & Co.）初版。本稿では DEVER・THRIFT・EDITION “The Story of My Life” HELEN KELLER 1996 by Dover Publications, Ins を参照した。
- 9 中国において、ヘレン・ケラーの著作は一九七〇年李漢昭氏の翻訳により『假如给我三天光明』と題して出版された。同書にはヘレン・ケラーの作品から“The Story of My Life”（1903）、“Out of the Dark”（1913）、“Teacher”（1955）の三作品が収められている。『語文』七年級上冊第七課「再塑生命的人」によれば、同課の本文「再塑生命的人」は、『假如给我三天光明』（李漢昭訳 華文出版社二〇〇二年版）から引用したと注記されており、同書の第一篇「张开心灵的眼睛」に第五章「再塑生命的人」が含まれる。本稿では、2011年北方婦女兒童出版社から発行された李漢昭訳『假如给我三天光明 海伦・凯勒自传』を参

照した。

- 10 前掲「再塑生命的人」34～35頁。
- 11 前掲「再塑生命的人」35頁。
- 12 前掲「再塑生命的人」38頁。
- 13 前掲「再塑生命的人」研讨与练习39頁。
- 14 前掲『教師教学用書』7「再塑生命的人」(教学建议)57頁。
- 15 本稿では、以下を参照。“My Early Life” 1874-1904 WINSTON CHURCHILL Introduction by Willam Manchester TOUCHSTONE BOOK Published by Simon & Schuster 1996 日本語訳は複数出版されているが、本稿では中村祐吉訳『わが半生』(中公クラシックスW78 中央公論新社2014年)を参照した。
- 16 『語文』七年級上冊第二单元第8課「我的早年生活」41頁。
- 17 同上「我的早年生活」41～42頁。
- 18 同上「我的早年生活」43頁。
- 19 同上「我的早年生活」46頁。
- 20 前掲『教師教学用書』8「我的早年生活」(教学建议)二「教学设计」(一)「教学目标」(2、3)63頁。
- 21 『語文』七年級上冊第二单元第9課「王几何」47頁。
- 22 前掲「王几何」(研讨与练习)51頁。
- 23 前掲『教師教学用書』9「王几何」(课文检讨)67頁。
- 24 前掲『教師教学用書』9「王几何」(教学建议)二「教学设计」(1、2)69頁。
- 25 前掲「王几何」50頁。
- 26 同上。
- 27 課程教材研究所・歴史課程教材研究開発中心編著『義務教育課程標準実験教科書 中国歴史』七年級上冊(人民教育出版社2006年第2版)9「中華文化的勃興(二)」46頁。
- 28 『語文』七年級上冊第二单元第10課「《论语》十二章」(研讨与练习)55頁。
- 29 「中華人民共和國義務教育法」(一九八六年制定、二〇〇六年修訂版)：(第二十九条)教師在教育教学中应当平等对待学生，关注学生的个体差异，因材施教，促进学生的充分发展。教师应当尊重学生的人格，不得歧视学生，不得对学生实施体罚、变相体罚或者其他侮辱人格尊严的行为，不得侵犯学生合法权益。
- 30 前掲「我的早年生活」44頁。